ダウン症児の常同行動に関する事例の検討

青木希美

(淑徳大学大学院 総合福祉研究科 心理学専攻)

キーワード：ダウン症候群 常同行動

Case study on Stereotyped behaviors of children with Down syndrome

Nozomi Aoki

(Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Studies Shukutoku Univ.)

Key Words: Down Syndrome, Stereotyped behavior

目 的

常同行動について、ウィング(1998)は反復的な動作であるとして、例えば手をひらひらさせる、頭をくるくる回すといった行動を挙げている。常同行動の発現要因として、感覚刺激や興奮が想定されており、宇佐川(2007)は、初期感覚が常同行動になりやすいことを指摘している。常同行動の消失について細淵(2003)は、定位・探索行動の高次化を挙げ、池畑(2007)は物の関係理解が安定することが消失につながると述べている。しかし、常同行動はその対応方法によっては、環境への働きかけの手段にもなりうることも考えられ、その発現と消失の特徴を明らかにすることは、常同行動をもつ子どもへの支援に際しても有用だと考えられる。

そのために、本研究では、療育場面における先行刺激とその反応の関連について1つの常同行動に焦点を当て、検討を行うこととした。

方 法

対象児：A児(男児 6歳3ヵ月 ダウン症候群)

3歳0ヶ月時にC市中心障害児総合通園センターにおいて検査を受け、重度精神遅滞という検査結果であった。ひとみしりや分離不安はないが、意味のある発語はなく、いくつかの音素での発音がみられる程度であった。要求手段は主にリーチングであり、発達段階は新版K式発達検査の結果では精神年齢が11ヵ月であった。

対象となる常同行動はロックキングとした。その理由としてA児には、感覚遊び的に内にもくるロックキング場面と、働きかけに応じる外界志向性のあるロックキング場面があるように見受けられたためである。そのような二面性はA児が有する他の常同行動では特に見受けられなかった。ロックキングの分析は療育場面で記録されたVTRを用いて、ロックキングの開始から停止までを1ケースとした、全145ケースを検討した。

また、ロックキングの開始前・停止前の課題状況をそれぞれ刺激と捉え、それらを①拒否(前の課題を押し返す)②音楽③操作④物とのかかわり⑤手持ちぶさた⑥Th(Therapist)の介入⑦注目⑧物がなくなる、といった8項目に分類した。

結 果

分類ごとの回数の結果を図1に示す。ロックキングの開始前刺激を分類ごとに見ていくと、「音楽」が最も多く、次いで「Thの介入」が多かった。「拒否」は少なく、その他の5項目はほぼ同じ頻度であった。停止前刺激では「注目」が最も多く、次いで「Thの介入」であった。停止前刺激で最も頻度の高かった「注目」の対象を見ると「物」と「Thの動作」の2点であった。「物」の場合にはA児が好む教材であることがほとんどであった。「Thの動作」には、A児に直接的なアプローチはせず、主に次の教材の準備をするような受動的なものと、A児に直接アプローチを行っており、教材をA児に近づけたり、下げたりするような能動的なものがみられた。具体的場面としては、教材を下げられそうになると、Thに取られまいと引き寄せたあとThの顔に注目するといった場面がみられた。

図1. 開始前刺激・停止前刺激

考 察

ロックキングは音楽提示下において頻繁に発現していたが、音楽提示下では体を使った常同行動が発現しやすいとされているこれまでの先行研究とも一致していた。A児のロックキングは、何かに注目していないときや、物と関わっていない場合に発現しやすいことが見出された。反対に、ロックキングが停止する前は何かに注目していることが多かった。注目の対象について詳しく見ていくと、ThがA児に受動的なかわりをしたあとでは、次の課題への「期待」や、Thが立てた物音のした方向を「探索」といった様子の行動が見られた。また、能動的なかわりをしたあとでは、Thが教材を下げようとしたときにA児がThの顔を見て「不満」もしくは「警戒」を示す行動が行われていた。これらの様子からA児のロックキングにはThに対する意思表示の意味合いも含むのではないかと考え、池畑(2007)、細淵(2003)が述べている常同行動が外界行動へと分化しているという説を支持するものとも考えられるだろう。

今回の検討では発達初期のダウン症児1名のみを対象としており、今後は同じ発達段階で同様に常同行動が見られる他児との比較も行うことが必要であると考えられる。

引用文献

- 池畑美恵子(2007). 重度発達遅滞児の常同行動と対物認知の発達臨床的検討 発達臨床研究 Vol.25 p19-30
 宇佐川浩(2007). 障害児の発達臨床Ⅰ 感覚と運動の高次化からみた子ども理解 学苑社
 林恵津子(2000). 自閉性障害児・者における常同行動の発現の要因 特殊教育学研究 第38巻 第3号 p39-46
 細淵富夫(2003). 重症心身障害児における定位・探索行動の形成 風間書房
 ローナ・ウィング(1998). 久保絃章・佐々木正美・清水康夫訳 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック— 東京書籍株式会社